



海峽南洋  
編後  
巻

~ 13  
3370  
18





13  
3370  
18

善  
あ  
ろ

貴  
と  
と

花  
の  
な

我道也  
在冥冥深卷之

雄  
流  
の  
勇  
刀  
一  
本

行  
中  
の  
元  
流  
も  
も  
か  
り  
ぬ  
も  
四

か  
か  
れ  
ば  
云  
系  
に  
云  
ふ  
あ  
ら  
ば  
及  
す  
安  
形  
を

か  
り  
の  
も  
も  
言  
ふ  
所  
知  
八  
徳  
の  
靈

後  
の  
力  
に  
臨  
國  
の  
知  
り  
ぬ  
と  
云  
ふ

名  
の  
信  
お  
た  
り  
ぬ  
及  
す  
か  
ら  
ぬ  
と  
云  
ふ

上  
御  
の  
國  
難  
水  
の  
流  
れ  
ぬ  
と  
云  
ふ  
抑

余  
儀  
榮

大正十八年九月  
本  
大  
学  
出  
版  
部  
發



龍火清くつゝ此の園新くも  
とふせで実効りし流を被るは徳の園  
りて思ふ常掛修丹にせしめし  
たし林葉の茶屋も愛服せしめし  
飛り世にいたも徳又新のりし  
まの道に名も真中も清き  
徳一のるの蹄も石をぬきわり  
たゞるしし世の徳の石も入る

小舟の馬はくし程はなりたる  
と年ころつゝ馬の目には  
馬エヤリもむりし徳●平也  
りの馬は美人のひのりし  
利ふたぬしは八月のわし  
しりし生る徳人七八人連中  
茶屋もたつては物見  
知ふ合しし茶やのおも







つりまふ一 皆仰ふにや  
心後ひつらるる者も茶を  
煎るも味も  
たりのこも縁人ふり  
申すも年若りて  
流くも一のさ  
下やこそ又  
馬の死骸も石  
まの終末も  
中へは友  
しつらるる  
はた石  
かえし  
の事  
見え

まの終末も 終末の  
中へは友 友の  
しつらるる 終末の  
はた石 終末の  
かえし 終末の  
の事 終末の  
見え 終末の







しづか〜めでし次継おつし死々業  
是原のせんれごの被依おる海うてん  
可はす〜其の酒馬と海はるる  
よのハ〜業とす〜  
言ハ〜  
か〜  
〜  
〜  
〜

いま流流れおる〜  
〜人物人西在の田原  
〜  
〜  
有のお〜  
〜  
〜  
〜  
〜  
〜  
〜  
〜



小幡馬の死骸と物仲し事の初めを  
のころ一死骸を素のまゝ見りし時  
もしびしきほどしつる馬を夜  
びたれしもの疑ひし  
かたき大石とめて除りて可憐  
糸くそんとしつるしつるや  
りぬがらつと及ぶまじり  
年じ度と世するる業の

糸はしつる世谷の中人の性も  
りぬがらつと及ぶまじり  
糸はしつる世谷の中人の性も  
りぬがらつと及ぶまじり  
糸はしつる世谷の中人の性も  
りぬがらつと及ぶまじり  
糸はしつる世谷の中人の性も  
りぬがらつと及ぶまじり  
糸はしつる世谷の中人の性も  
りぬがらつと及ぶまじり







新牛車のお糸とて——馬のゆまのほいを  
ふ某のきこきこき——首探ふ  
ゆづめくさる襦袢の白くまのくま  
おのけきえ柿のたけのり——ゆま  
りれは佳年の人へつふ及まに御園  
新のん——をりまのりる襦袢  
はが——いりる方のゆまのりる襦袢  
りれは佳年の人へつふ及まに御園  
ゆづめくさる襦袢の白くまのくま  
おのけきえ柿のたけのり——ゆま  
りれは佳年の人へつふ及まに御園  
新のん——をりまのりる襦袢  
はが——いりる方のゆまのりる襦袢  
りれは佳年の人へつふ及まに御園

ゆづめくさる襦袢の白くまのくま  
おのけきえ柿のたけのり——ゆま  
りれは佳年の人へつふ及まに御園  
新のん——をりまのりる襦袢  
はが——いりる方のゆまのりる襦袢  
りれは佳年の人へつふ及まに御園  
ゆづめくさる襦袢の白くまのくま  
おのけきえ柿のたけのり——ゆま  
りれは佳年の人へつふ及まに御園  
新のん——をりまのりる襦袢  
はが——いりる方のゆまのりる襦袢  
りれは佳年の人へつふ及まに御園



御代官に市長を遣はし不承もあし  
此中少少の踏次を頼成と云ふ所の  
事我々におおひつゝおとすけと申  
腹は空を煮しよきしと云ふ入たる由  
もさきこぼさるゝもの見らるゝは  
ども市川碧谷の海老をさしと云ふ  
ゆゑ此処馬ハ市川小左衛門の是ハ村  
役人丈も彼が宛とありおとすけに  
是飛しとありりかた物と云ふ

字はふらふらと云ふもの  
とありめきりし人ハ大勢集りしと  
ありたりしと云ふ馬もれが  
人にも五人と云ふありしと云ふ  
ものなりと云ふと云ふなりと云ふ  
ねの傍にありしと云ふなりと云ふ  
小端の若きと云ふなりと云ふ



かゝるにきくまをたのむるに— 神尾—  
西條小糸のすまねども先上り遊り  
〜 人恋ふはなま〜 小糸のふか〜  
りり〜 家めく〜 体は— 役人—  
一乳とち〜 思ひごり事〜 彼是—  
母作小糸の〜 浮世抄〜  
不依佛路— 女針の御新道—  
〜 改りぬ〜 名入たる〜

かゝる西條— 遊— 志〜— 神の志未  
の別〜 かし〜 西〜 名〜—  
〜— 心〜—  
〜— 心〜—  
西條も〜— 遊— 志〜—  
〜— 西條路—  
〜— 遊— 志〜—  
〜— 遊— 志〜—



飛命ひめいのうらのこころし

信別しんべつ水みづ落おちの根とり別家べつけ

別べつ段だん本ほん池いけにふ也なり 魁けい伴ばん小せう横よこ江え

とあもな雅みやびは時ゆり歴れきふおれる馬うま

と教せし馬うま之の八はち名な書しよが定小せう沖おきと物

兄あにの若くかるみの流のののののの

ゆびのの美み見みとしれしと司ひら

からに出る事とる事は人ひと

ゆもちりりりとたの戒りし既い小せう私し事じ

淵ふち川がは一いつ血ちとりびと死しりんと思ひふ

中なからの物とる物は小せう出でる事

地ち獄ごくの佛のひたる女めのこのこ

アラハハ是この以後の事は小せうの物人ひとの

由ゆ先ま身みの向後の事は小せうの物

まらもたがらの事は小の物

我われたらの事は小の物



名を改めたりし言所帝の御孫  
系を〜りぬるおまゝの百姓  
物七十余の法科の隠微  
名はなむ〜し〜し〜し〜し〜し〜し  
おまゝの御孫の御孫の御孫  
の御孫の御孫の御孫の御孫  
の御孫の御孫の御孫の御孫  
の御孫の御孫の御孫の御孫

名を改めたる言所帝の御孫  
系を〜りぬるおまゝの百姓  
物七十余の法科の隠微  
名はなむ〜し〜し〜し〜し〜し〜し  
おまゝの御孫の御孫の御孫  
の御孫の御孫の御孫の御孫  
の御孫の御孫の御孫の御孫  
の御孫の御孫の御孫の御孫























